

## ノヴォトニー失脚再考 ブレジネフのプラハ訪問（1967年12月）を中心に

我 妻 真 一

はじめに

1. 脱スターリン化の諸相
2. ノヴォトニー体制の動揺
3. ブレジネフのプラハ訪問

おわりに

はじめに

一般に「プラハの春」の名で知られる1968年のチェコスロヴァキアにおける改革運動は、軍事介入による改革の頓挫という悲劇性も加わって、冷戦期ソ連＝東欧圏で起きた事件の中でも注目を集めた事例である。しかし「プラハの春」は1968年という時間に限定される事象ではなく、1968年に至る脱スターリン化の過程を射程に組み入れることによって、その全体像が理解できる。この証左としてチェコスロヴァキアにおける共産党体制の形成やその特質、また1960年代に表面化してきた矛盾や歪みを政治、経済、社会、文化などの観点から多面的に考察した研究が数多く発表されている（cf. Golan, 1971; Kusin, 1972; Skilling, 1976, chs.3-6; 平田, 1977）。

他方で、「プラハの春」に対して敏感な反応を示したソ連指導部は、改革が本格化する1968年以前のチェコスロヴァキア情勢をどのように認識していたのであろうか。この時期のソ連の態度を端的に表しているのが、ブレジネフ（Leonid Brezhnev）が語ったとされる「これはあなたたちの問題だ」という発言である。しかしこれまでの研究においては、発言の高い認知度にもかかわらず、その含意や意味合いに十分な注意が払われてきたとは言い難い。その一因として、ブレジネフの発言と符合する形で、ノヴォトニー（Antonín Novotný）からドブチュク（Alexander Dubček）への権力移行が混乱もなく行われたことが指摘できる。それゆえソ連は消極的な対応に終始したと当然視されてきたのではないだろうか。本稿では、

新たな資料 (Vondrová and Navrátil eds., 1995; Navrátil ed., 1998) を用いて、ノヴォトニー失脚をめぐるソ連の対応を検討していく。

以上の問題関心を敷衍するならば、1967年末の情勢は「[改革の] 効果を高めるためにさらに徹底して推進するか、あるいはそれが引き起こしつつある混乱の收拾のために中断するか」の転換点」(ロスチャイルド, 1999, 256: [ ] 内は引用者, 以下同様) にあった。そして硬直した体制というよりもむしろ、「ある程度制度化された決定システム」(林, 1996, 233) であったノヴォトニー体制の崩壊が「驚き」(Skilling, 1976, 161) をもって迎えられたことは、その要因、過程、帰結を再検討する作業が1968年1月以降の改革運動を理解する上でも不可欠であることを示唆している<sup>1)</sup>。特にノヴォトニー失脚からドブチェクの第一書記選出に至る過程で、ソ連がどの程度関わっていたのかを明らかにすることは、なぜ軍事介入によって「プラハの春」が終わったのかという問いにつながっていく。

そしてノヴォトニー失脚過程において重要な意味を持っているのが、12月8 - 9日のブレジネフのプラハ訪問である。東欧諸国における指導部の交代は、戦後築かれたソ連の支配体制に影響を与えるという意味で、ソ連にとって重大な関心事である。この点に関して、ムリナーシ (Zdeněk Mlynář) は、回想録で次のように述べている。

ドブチェクが第一書記になるまでは、第一書記の候補者だけでなく、党地方委員会書記長を含む一連の要職の配置は、モスクワの承認を受けるのが、チェコスロヴァキア共産党のしきたりだった (ムリナーシ, 1980, 135)。

つまりノヴォトニーがソ連の支持に依拠している以上、ソ連の同意なき解任という事態は考えられなかった (Skilling, 1976, 161)。しかし、このことは、ソ連の同意如何によってノヴォトニーの命運が左右されるとも理解できる。換言すれば、ブレジネフは、ノヴォトニーが引きつづき権力の座にとどまり、事態を收拾するだろうと信頼していたが、彼の「『明らかな』中立は、ノヴォトニーの立場を強化せず、彼がソ連の力に頼ることを困難に」し (*ibid.*, 169), 失脚という結末をもたらした。ブレジネフがこうした解釈の余地を残すような態度をとったのはなぜかという点を明らかにすることが本稿の課題である。

以下では、まずチェコスロヴァキアにおける脱スターリン化の諸相を簡単に素描する。次に1967年に入って対立が深まり、ノヴォトニー体制が動揺していく過程を扱う。そして1967年12月のブレジネフのプラハ訪問の状況とその帰結を明らかにする。

## 1. 脱スターリン化の諸相

1956年のソ連共産党第20回大会におけるフルシチョフ（Nikita Khrushchev）のスターリン批判演説は、戦後ソ連をモデルとした社会主義建設を進めていた東欧諸国の指導層に大きな衝撃を与えた。スターリン批判という外的要因に起因する脱スターリン化は、東欧各国の内的諸条件と相互作用することで、その経過、度合い、帰結などの点で各国ごとに異なる形で展開した。たとえば、ポーランドやハンガリーにおいて共産党体制が危機に陥り、とりわけハンガリーでは事態收拾のためにソ連軍が介入する結果を招いた。

こうした隣国とは対照的な動きを見せたのがチェコスロヴァキアであった。1953年ゴットワルト（Klement Gottwald）に代わって党第一書記に、またザーポツキー（Antonín Zápotocký）が死去した1957年に大統領にも就任したノヴォトニーが権力を握っていたチェコスロヴァキアにおいて、彼の権力を脅かすほどスターリン批判の影響は大きくなかった。このことは、1960年には「わが国では資本主義から社会主義への移行に関するあらゆる主要な課題はすでに解決された。[中略] 社会主義の道としての人民民主主義は十分にその真価を發揮し、我々をその[社会主義]勝利へと導いた」（*Ústava Československé socialistické republiky, Prohlášení II*）と謳う憲法が制定されたことにも看取できる。

しかし1960年代に入ると、憲法の文言とは裏腹に、チェコスロヴァキアでも徐々に改革を求める声が聞かれるようになった。こうした改革の要求は、主に肅清犠牲者の名誉回復、スロヴァキア問題、経済の停滞に起因していた。

これら脱スターリン化の諸相を論じる前に、スターリン死後、特に1960年代のチェコスロヴァキアを取り巻く国際環境について簡単に整理しておきたい。1956年から68年までのソ連＝東欧関係は、ワルシャワ条約機構やコメコンの強化を通じて、戦略的、経済的、政治的に東欧諸国との関係が密接になっていくと同時に、中ソ対立の公然化、ルーマニアやアルバニアの離反などによって国際共産主義運動におけるソ連の指導的立場が揺らぎ始める複雑な状況であった（Kramer, 1998, 111-121）。このように、戦後構築された社会主義圏の秩序は正反対の力学によって変容しつつあったが、クレイマーによれば、全般的な傾向としてソ連＝東欧関係は、「ソ連支配の強化ではなく、その喪失へ向かっ」ていた（*ibid.*, 117）。

チェコスロヴァキアとの関連で、次の2点が注目される。第1に、かねてからソ連が要求しているソ連軍のチェコスロヴァキア駐留問題である。東ドイツやポーランドとともに、対西側戦略において地政学的に重要な位置にあるにもかかわらず、チェコスロヴァキアには、戦後ソ連軍が駐留していなかった。そのため、ソ連側は幾度となくこの問題を提起していたが、チェコスロヴァキア指導部は否定的な態度を崩さず、要求に応じなかった。その後も、ワルシャワ条約機構加盟国内で兵器の近代化や規格の統一、共同軍事演習の実施、戦術核とその運搬手段

の配備が進むにしたがって、再びこの問題が両国間で議論されるようになった（Rice, 1984, 100-101; Kramer, 1998, 114-115）。それでも地上軍の配備を要求するソ連側に対し、ノヴォトニーは拒否の姿勢を貫いた。

第2に、西ドイツとの関係である。大連合政権の成立に伴って、ハルシュタイン原則を放棄した西ドイツは、新たな外交政策を展開し、東欧諸国との関係構築に動き出した。これまでソ連・東欧圏の結束を支えてきた西ドイツに対する「脅威」認識が薄らぎ、東欧諸国は、経済的な関心からも、相互に貿易事務所を開設するなど西ドイツへ接近していき、1967年2月にはルーマニアが国交を樹立した。チェコスロヴァキアも同様に西ドイツへの接近を試み始めた。そのため同年3月に東ドイツとの間で締結された相互保証条約では、ノヴォトニーは西ドイツと関係を損なう可能性をなるべく取り除こうとした。こうした動きに対し、東ドイツの指導者ウルブリヒト(Walter Ulbricht)は東ドイツ国家の正当性を否定しかねないと警戒感を募らせた。1967年4月、チェコの保養地カルロヴィ・ヴァリで開かれた全欧州共産党会議で、西ドイツが東ドイツを承認しない限り、国交樹立を控えることが確認され、西側との緊張緩和は一時的に停滞することになった（Sodaro, 1990, 98）。

このようにチェコスロヴァキアを取り巻く国際環境が変容していく中で、国内においても共産党体制の歪みが露呈し、改革が求められるようになった。そうした要求の一つとして浮かび上がってきたのが、1950年代に吹き荒れた粛清の嵐によって犠牲となった人々の名誉回復をめぐる問題である。チェコスロヴァキアでは、1952年に党書記長であったスラーンスキー（Rudolf Slánský）や外相のクレメンティス（Vladimír Clementis）などの最高幹部までもが「シオニスト/チトー主義者」の罪名で処刑されるなど戦後東欧諸国の中で最も大規模な粛清が行われた。粛清の対象は、「シオニスト/チトー主義者」だけにとどまらず、スロヴァキア人も数多く含まれていた。1944年の「スロヴァキア民族蜂起」などの第2次大戦中の抵抗運動で活躍したスロヴァキア共産党員は、戦後「ブルジョワ民族主義者」という批判を浴び、公的生活から追放された。その中には、軍事介入後、ドブチェクに代わって第一書記に就任し、「正常化」政策を行ったフサーク（Gustáv Husák）も含まれていた。

スターリン批判を受けて、チェコスロヴァキアでもようやく粛清裁判の実態調査が開始された。しかし、ノヴォトニーなど粛清に深く関与していた人々が依然権力の中核にいた状況で、1957年にバラーク（Rudolf Barák）委員会が提出した報告書は、責任の所在を不明確したままで、内容的に十分なものとは言い難かった。そのため1962年にコルデル（Drahomír Kolder）委員会が設置され、再調査の結果、1963年4月に387人の名誉回復がなされた。さらに12月にはスロヴァキア共産党員に対する「ブルジョワ民族主義者」という罪名を無効とすることが決定された<sup>2)</sup>。

スロヴァキアの不満は粛清問題だけでなく、国家のあり方にも起因していた。共通の歴史的

経験を有していないチェコとスロヴァキアは、1918年に一つの国家として独立し、国家の統合理念としてチェコとスロヴァキアに差異が存在しないとする「チェコスロヴァキア主義」が採用された。しかし実際はチェコが政治や経済の主導権を握り、スロヴァキアは従属的な地位に置かれた。戦後の社会主義化政策も、『チェコスロヴァキア主義』の新たなイデオロギーの上塗り」（高橋、1997、76）でしかなく、中央集権化によって権限のプラハ集中がますます進み、スロヴァキアの自治は制限されていった。この傾向は、1960年憲法で決定的となった。スロヴァキア国民評議会（Slovenská národná rada）は一地方機関に格下げされ、スロヴァキアの利益を代弁する機能が奪われることになったのである（*Ústava Československé socialistické republiky*, Hlava šestá）。さらに後述する経済状態の悪化は、急速な工業化による経済システムの転換を進めていたスロヴァキアに重大な打撃を与えた。こうした不満に耳を傾けず、スロヴァキアのエゴとみなしていたノヴォトニーの侮蔑的な態度もスロヴァキアの反発を高め、反プラハノヴォトニー意識を醸成する要因となった。

その結果、1963年ノヴォトニーの信任を得ていたバツィーレク（Karol Bacílek）に代わり、ドブチェクがスロヴァキア共産党第一書記に就任した。またムニャチコ（Ladislav Mňačko）をはじめとするスロヴァキアの作家たちは、『文化生活 *Kulturní život*』などの雑誌において、スターリン主義批判を展開するなど自由な議論を交した。このようにスロヴァキアはノヴォトニー批判の拠点の一つとして重要な役割を担うようになった<sup>3)</sup>。

最後に経済の停滞について触れておきたい。戦後、主要産業の国有化や農業の集団化など急速な社会主義建設の下、重工業に経済構造の重点が移り、原料となる天然資源やエネルギーのソ連依存度が高まった。この経済転換は1950年代を通じて高い成長率をもたらした。しかしチェコスロヴァキア経済も1960年代に入ると失速し始めた。第3次5ヶ年計画（1961-65）が、1年あまりで放棄を余儀なくされたことは、経済状態の深刻さを如実に物語っている。さらに中ソ対立の公然化によって、中国という輸出市場が失われ、新たな輸出先を探す必要に迫られた。そこで西ドイツとの関係改善が模索されたが、前述したようにこの動きは東ドイツの反発を招き、期待された結果を得ることができなかった。

このため、さすがにノヴォトニー指導部も経済改革が必要であると認めざるをえない状況に直面した。そこで1963年に経済システムを検討する委員会が設置され、経済学者シク（Ota Šik）を中心に市場原理の導入や企業の自主性を認めることなどを柱とした経済改革案が検討された。この案は1965年に党の承認を得るに至り、1967年1月から実施された。しかし、改革が自らの権力基盤を侵食することを嫌ったノヴォトニーは、その影響を最小限に食い止めようとしたため、期待された成果を挙げることができなかった。ノヴォトニー指導部の消極的な姿勢に失望した経済改革の主唱者たちの間では、次第に政治システムの改革が経済の立て直しに不可欠であるという認識がもたれるようになった。

## 2. ノヴォトニー体制の動揺

チェコスロヴァキアにおける脱スターリン化は、最終的に党と国家の最高職を独占していたノヴォトニーに対する批判へと収斂していった。以下では、ノヴォトニー批判が一段と高まった1967年の展開を論じていく。

先述したように、1967年1月に導入した新たな経済システムが十分に機能しなかったことは、改革の争点を経済から政治へと向けさせた。この認識の変化は、スロヴァキアの地位改善の要求や、法制度の適切な運用、憲法に記された権利の擁護といった現体制に対する不満が体制の抜本的改革を求める運動へと転化していく契機となった。

その先鞭をつけたのは、創作活動に対する党の介入や検閲に不満を抱いていた作家たちであった。そこで党の政策が公然と批判され、「ブラハの春の直接的序幕」(ハヴェル, 1991, 133)となった6月27 - 29日の第4回チェコスロヴァキア作家同盟大会における議論の要点を概観していこう (Navrátil ed., 1998, no.1; Hamšík, 1971; French, 1982, ch.IX; Shore, 1998, 431-436)。

大会の開会演説で、クンデラ (Milan Kundera) は、「すべての人が十分に語り、自由に論議できるよう保証する」ことが作家同盟の役割であると述べ、「言葉や思考の自由に対するいかなる介入も」文学の発展にとって障害となり、精神的自由に文学の命運がかかっていると述べた (クンデラ, 1968, 128)。ヴァツリーク (Ludvík Vaculík) は、憲法条文を例にあげながら、いかに生活が圧迫され、自由が抑圧されているかを糾弾した。彼の言葉によれば、「基本的な市民としての自由、すなわちお互いに平等な立場で話すという自由に制限が加えられて生きている」のである (ヴァツリーク, 1968, 147)。そして、「わが国では20年間に、いかなる人間的な問題も解決されていないことを見るべきである」(同上, 158)とこれまでの党の政策を批判した。コホウト (Pavel Kohout) は、ソルジェニーツィン (Aleksandr Solzhenitsyn) が5月のソ連作家同盟大会に宛てた検閲や執行部批判を内容とする書簡のコピーを読み上げ、憲法に規定された言論の自由を擁護することが作家の役割であるという立場から、党による統制強化を規定した出版法を批判した (Navrátil ed., 1998, no.1, 10)。このように作家たちは一様に党指導部に批判的な意見を表明した。

党を代表して大会に出席していたヘンドリフ (Jiří Hendrych) 中央委員会書記は、こうした作家たちの意見に反論した (*ibid.*, no.1, 11-12)。彼は、大会の議論によって深刻な問題が提起されたと指摘し、共産党員である作家たちの批判は、これまでの共産党や社会主義建設の歩みを否定したり、現状をナチス占領期と重ね合わせる傾向をもち、共和国や共産党の政策と根本的に反する見方に基づいていると反論した。そして「政府の政策を公然と批判する共産主義者を理解できないし、許容することはできない」とイスラエル擁護の発言をしたコホウトに異議を唱えた。しかも彼がソルジェニーツィン書簡を読み上げたことは、ソ連との友好関係を損な

う可能性もあり、その態度は無責任であると批判した。さらにイデオロギーの領域において、マルクス・レーニン主義を侵食し、放棄する危険な傾向が作家同盟内部に存在すると述べるなど、そのトーンは激しいものであった。

ところで作家同盟大会における議論が予想以上に激化した背景には、6月5日に発生した第3次中東戦争の存在が指摘できる。ソ連に歩調を合わせて、反イスラエルの立場をとったノヴォトニーの態度は、作家をはじめとする知識人たちに衝撃を与えた。ゴランによれば、中東戦争が果たした役割は次の2点である。第1に、第3次中東戦争は、それまで純粋に国内問題に限られていた脱スターリン化にまったく新しい要素をもたらし、「国内政策の脱スターリン化と対外政策のその間にあるギャップを架橋した」。第2に、イスラエルを批判するにあたって使われた反ユダヤ主義的な言説が、知識人たちに粛清時代の記憶を思い出させたことである（Golan, 1971, 236-237）。たとえば、コホウトの発言に第1の指摘が看取できる。彼は、「民族的存在を守るため、先制攻撃をするならば、その国家は間違っていると考えられるだろうか」と提起した。彼がイスラエルとアラブ諸国の関係を借りて、チェコスロヴァキアとソ連のそれに言及し、現指導部の政策を批判していることは誰の目にも明らかであった（Shore, 1998, 432）。

ノヴォトニー指導部は厳しい姿勢でこうした作家たちの動きに対応した。9月のチェコスロヴァキア共産党中央委員会幹部会で、ヘンドリフは、先の作家同盟大会における議論を報告し、現指導部に批判的な作家を除名するなどの措置を提案した。この提案を受けて、9月26-27日の総会で、ヘンドリフ報告が承認され、党の政策を批判した作家たちに対する措置として、プロハースカ（Jan Procházka）を中央委員候補から解任し、クリーマ（Ivan Klíma）、リーム（Antonín J. Liehm）、ヴァツリークの党籍を剥奪し、コホウトとクンデラを懲戒処分にするのが決議された（Navrátil ed., 1998, no.1, 12）。また作家同盟の機関紙『文学新聞 Literární noviny』の編集部も総入替えとなり、文化省の管轄下に入り、事前検閲が強化された。

高まる批判を押さえ込んだかに見えたノヴォトニーであるが、それは一時的なものでしかなかった。「その後2ヵ月以上つづいた闘いの幕開け」（ドブチェク, 1993, 206）あるいは「1968年1月の諸事件は、実際には、[1967年]10月の党中央委員会ではじまっていた」（スルコフスキー, 1976, 21）と形容される10月総会では、権力集中をめぐる激しい議論が交わされ、ノヴォトニー批判が公然と語られるようになった。

総会においてドブチェクは、指導部の自己批判、党と政府の権限の明確な区分、行動綱領の作成の3点について問題提起を行った（ドブチェク, 1993, 204-205）。その演説では、党は「諸問題の原因を理解し、それらの解決策を探求し、更なる進歩に向けて働く努力に精力を集中すべきである」と述べ、「党運営における実質的な変化、党内の民主主義を深めることが不可欠である」という見解を提示した。また「党とその中央委員会は政府ではない」とし、「政府が

十分な役割を果たしていないとしても党がその職務や責任を引き継ぐことはできない」と述べ、党と政府の機能を峻別することを重視する考えを明らかにした (Navrátil ed., 1998, no.2, 15)。党と政府の機能を分けることを示唆したこの発言は、言うまでもなくノヴォトニーに集中している権力の分散を意味していた。

このドブチェック報告を「偏狭な利害にとらわれている」とみなしたノヴォトニーは、チェコ人やスロヴァキア人にかかわりなく、国家全体のために問題解決にあたるべきであるのに、この点で合意が得られていないと指摘した。さらにドブチェックの要求は問題をチェコとスロヴァキアの対立に還元するものであり、ドブチェックがスロヴァキア共産党第一書記として正しく、責任ある政策を実行していないと非難し、彼の提案を一蹴した。また対立点の一つであったスロヴァキア問題についても「既存の生産施設を近代化し、国全体の経済を発展させることがスロヴァキア発展にとっても有益である」( *ibid.*, 15-17) という見解を示し、スロヴァキアに特別な配慮を払う意思を見せなかった。このようにノヴォトニーは、ドブチェックの要求を「民族主義的」という観点からのみ捉え、その姿勢を批判したのである。

ドブチェックとノヴォトニーが激しい議論を戦わせていた最中の10月31日、「中央委員会の空気をさらに過熱させる役をはたした」(ドブチェック, 1993, 206) 学生デモが起こった。学生寮の停電に対する抗議という生活状況の改善を要求として掲げたデモは、次第にその様相を政治的なものに転化させていった。これに対しノヴォトニーは、警官隊による鎮圧という手段に出た。しかしこの対応は学生たちの間にもノヴォトニーに対する不信感を高めただけであった。

党内対立が明らかとなった10月総会は、ノヴォトニーがロシア10月革命50周年記念式典に出席するという理由によって、対立の火種を残したまま閉会となった。そして党内外からの批判に曝され、危機感を抱いたノヴォトニーは、モスクワ滞在中ブレジネフに対してブラハ訪問を要請したのである。

### 3. ブレジネフのブラハ訪問

ここでは、12月8 - 9日のブレジネフ訪問を考察対象として設定し、ブレジネフ自身の発言に依拠しながら、訪問の目的とは何であったのか、訪問中に行われた共産党幹部会員との意見交換を通じて、ブレジネフはいかなる結論に達したのかといった問題を検討していく。

12月8日ブレジネフが非公式にチェコスロヴァキアを訪問した。この訪問は、ソ連の支援を得ることで、党内対立を解消し、自らの権威を回復しようと考えたノヴォトニーの要請によるものであった。滞在中、ブレジネフはノヴォトニーだけではなく、幹部会のメンバー全員と会談を持ち、それは「日中、夜、そして翌朝と18時間休みなく続いた」(Navrátil ed., 1998, no. 5, 24)。そして訪問は、ムリナーシが「ノヴォトニーがもはや自分 [ブレジネフ] の政策に従順



な、役に立つ男ではなくなるとみて、かれを片付けようと思った」（ムリナーシ、1980、104）と回顧しているように、「ノヴォトニーの運命をチェコスロヴァキア共産党中央委員会幹部会における彼のライヴァルの手に委ねる」（Pikhoia, 1994, 5）結果となり、ノヴォトニーの目論見は見事に崩れ去ったのである。以下このような展開を辿った訪問の内実を具体的に検証していく。

まず訪問の目的である。狩猟をしたり、一般的な問題について意見を交わすというのが表向きの目的であったが、もちろん1967年12月のチェコスロヴァキア情勢を見れば、これが口実に過ぎないことは明らかであった。この点に関して訪問後に作成された「1967年12月8 - 9日ブレジネフ同志の訪問中の行動に関する報告」と題されたチェコスロヴァキア側の文書を見てみよう。それによると、ノヴォトニーがブレジネフに訪問を要請した理由は、10月総会で生じた状況を評価し、解決の糸口を見つけること、また発生した問題がいかなるもので、その原因が何であるかを考える必要からであった（Vondrová and Navrátil eds., 1995, no.1）。換言すれば「暴発寸前」（Chervonenko in Kun, 1999, 9）であった当時の党内情勢に関する「生の情報を得ること」（Fominov in *ibid.*, 58）によって、チェコスロヴァキア指導部内で何が起きているかをよく見極めることが訪問の目的であったと考えてよいだろう（Slavík in *ibid.*, 39）。

それでは訪問前のブレジネフは、チェコスロヴァキア情勢についていかなる認識を持っていたのであろうか。プラハ滞在中ブレジネフに同行したチェルヴォネンコ（Stepan Chervonenko）ソ連大使によれば、ブレジネフは、チェコスロヴァキア共産党内部で生じている問題について、現地から送られてくる情報に基づいた確固とした意見を持っていた（Chervonenko in *ibid.*, 7）。一例を挙げれば、在プラハ・ソ連大使館から、10月末の学生デモ、6月の作家同盟大会の議論、さらにポーランド指導部がチェコスロヴァキア情勢に関心を持って注視していることなどが報告されている（Pikhoia, 1994, 4）。

そのことは、「10月総会でのノヴォトニーに対する批判、無記名投票による党幹部の選出を求める提案、スロヴァキア問題などによって、党内の結束が乱れていることに注意を払っていた」（Vondrová and Navrátil eds., 1995, no.3, 32）という、プラハ訪問後の13日に行われたハンガリーの指導者カーダール（János Kádár）との電話会談におけるブレジネフの発言からもわかる。

その後も、ブレジネフはたびたび1967年後半のチェコスロヴァキア情勢に言及している。第1に、1968年3月23日のドレスデン会談で、ブレジネフは、時間の都合や職務で多忙であったにもかかわらず訪問の要請を受けた理由として、学生の要求や作家同盟大会における演説内容を挙げた（*ibid.*, no.24, 84）。第2に、7月16日にモスクワを訪れたフランス共産党書記長ロシェ（Waldeck Rochet）に対して、「1967年10月末に最初の合図があった」と語り、学生デモが政治的な要求を掲げたり、作家同盟大会でイスラエルとの外交断絶を取り消す要求が決議され

たことに言及している (*ibid.*, no.95, 305)<sup>4</sup>)。これらの発言からは、党内の対立よりもむしろ、その外側で起こった現象にブレジネフの注意が向けていたことが看取できる。

それゆえチェコスロヴァキアの国内情勢に関する正確な情報を持ち合わせていないまま、プラハを訪れたことが、ブレジネフの消極的な姿勢に反映された (Valenta, 1991[1979], 29) というよりもむしろ、ソ連共産党政治局員および書記局員は「当時チェコスロヴァキアで生じている事件に通曉していた」と考えるべきであり、「ブレジネフが1967年12月初旬にプラハを訪れたことは決して偶然ではない」(Pikhoia, 1994, 5)。

ただしブレジネフの発言を見る限り、彼が知りえた情報よりも、対立状況ははるかに複雑かつ深刻であったことがわかる。たとえば、ドブチェク率いるチェコスロヴァキア指導部の代表団がモスクワを訪れた1968年5月4日の会談で、ブレジネフは「プラハに到着してみると、自分がクライマックスに達していた出来事の渦中にいることに気づいた」と当時を振り返っている (Vondrová and Navrátil eds., 1995, no.53, 173)。またドレスデン会談があった3月23日付のソ連側文書における「この訪問の結果、チェコスロヴァキア共産党中央委員会幹部会において深刻な意見の相違が存在すること、[それは]ノヴォトニー個人や10月総会で上がった問題だけでなく、チェコスロヴァキア共産党の政策に関して、非常に広範な相違が話題になっていたことが明らかになった」(*Otechestvennye Arkhivy*, no. 3, 1993, 86) といった記述などからも、ブレジネフは党内の対立状況の根深さを目の当たりにしたといえる。

次にプラハ滞在中のブレジネフの行動を追っていこう。プラハ到着後、彼はノヴォトニー、レナルト (Jozef Lenárt)、コウツキー (Vladimír Koucký) と短時間会見した後、2度にわたりノヴォトニーと会談を持った。その後ドブチェク、レナルト、ドランスキー (Jaromír Dolanský)、ヘンドリフら幹部会員と会談を重ねた (Vondrová and Navrátil eds., 1995, no.1)。ブレジネフの誇張された表現に倣えば、「48時間のうち45時間をチェコスロヴァキア指導部との意見交換に費やす」(*ibid.*, no.3, 33; no.95, 305) ほど、精力的に行動した。

ブレジネフはノヴォトニーとの会談で、10月総会の経過について説明を受けた。ノヴォトニーは、スロヴァキア問題をめぐって党内の状況が悪化していると述べた (*ibid.*, no.95, 305)。しかし、この会談は「事態はノヴォトニーが思っている以上に複雑であること」、「問題がどの程度の規模で、中央委員会においてどのように表出しているか気がついていない」(*ibid.*, no.3, 32) という認識をブレジネフに抱かせた。そのため、ブレジネフは、多くの幹部会員から意見を聞く必要があると考えた (Chervonenko in Kun, 1999, 8)。

そのうち、ヘンドリフとドブチェクとの会談の様子を見てみよう。ノヴォトニーの右腕として知られ、党内ナンバー2の座を占めていたヘンドリフは、「第一書記にふさわしい人物を誰か」というブレジネフの質問に対して自分の名を挙げたという。この話を聞いたドブチェクによれば「一番の支持者であるはずのヘンドリフでさえノヴォトニーを見離している以上、もは

やノヴォトニーを支えるのは不可能だ」(ドブチェク, 1993, 214-215)という印象をブレジネフに与えた。ただし、ブレジネフがヘンドリフについて「彼の見解は間違っている。我々は彼の本当の性格に気が付いていない」(Vondrová and Navrátil eds., 1995, no.3, 33)と辛辣に語っていることから指導者としての資質に疑問を抱いていたことが看取できよう。

ドブチェクについて、ブレジネフは、誠実な人物であるため、「民族主義者」というノヴォトニーの非難が彼の怒りを買ったのは当然だと理解を示し、またドブチェクが党内の結束に向けて尽力すると語ったことを好意的に評価した (*ibid.*, no.3, 32-33)。7月のロシェとの会談の中でも「ドブチェクは権限分割の信奉者であり、党内で中心的な役割を担っている」(*ibid.*, no.95, 305)というブレジネフの評価が確認できる。一方ドブチェクによれば、「ブレジネフは、わたしの意見を聞き、いくつか補足質問をしたが、彼自身がどう思っているかは最後まで明らかにせず、聞き役に徹した」(ドブチェク, 1993, 215)。

翌9日に行われた幹部会員とその候補、および中央委員会書記全員が出席した会議で、ブレジネフは、「私がここに来たのは、あなた方の問題の解決に加わるためではない。あなたたちは確実に自力で問題を解決できるだろう」と党内問題に介入する意思を見せなかった。またブレジネフは、「幹部会において満場一致で同意が得られない限り、中央委員会の行動を想定できない。党の結束という問題は、党の中核である幹部会から発する最高の原則である。そして幹部会での結束は、中央委員会、さらに党全体の結束にとっての保証である」という見解を示し、問題は幹部会で解決されなくてはならないとノヴォトニーの意見に賛意を示した (Vondrová and Navrátil eds., 1995, no.2, 31)。

訪問によってブレジネフはどのような印象を受けたのであろうか。12月13日カーダールとの電話会談で自分の見解を率直に述べているように、ブレジネフは、ノヴォトニーの統治能力に疑問を感じた (*ibid.*, no.3, 32)。すなわち「党内にさまざまなグループが形成される事態に対してノヴォトニーは意見さえも持っていない」とみなし、これらの困難の主要な原因は、「ノヴォトニーが他の同志たちと協調できないことにある。つまり彼一人で多くのことを抱え込んでいる」。換言すれば「ノヴォトニーは集団指導がいかなるものであるか」を理解しているとは言い難いという判断を下したのである。

先に引用したソ連側文書でも「チェコスロヴァキア共産党中央委員会で生じた実際の状況を見ず、それに対する正しい評価を与えることができない」ノヴォトニーの能力に疑問を投げかけていることから、この点が推察されよう (*Otechestvennyye Arkhivy*, no. 3, 1993, 86)<sup>5</sup>。

しかし、以下のブレジネフの発言から明らかのように、ノヴォトニーを完全に見限ったわけではない。

こうした状況で、私は国内問題に加わるという印象がもたれないようにしたが、他方で幹部

会と中央委員会の結束に向けた助言と、同志ノヴォトニーへの支持を与える必要があった (Vondrová and Navrátil eds., 1995, no.3, 33)。

このように、ノヴォトニーを中心に党内の結束と安定に努めることが優先されるべきと考えていた。その意味でブレジネフの態度は両義的であり、曖昧さを残している。

この点について詳しく見てみると、ブレジネフは党内対立のエスカレートを回避するため、党内の結束と安定が重要であると何度も強調している。幹部会員たちとの意見交換から、ブレジネフは「幹部会には結束がなく、勢力はほぼ半々に分かれている」と判断した (*ibid.*, no.3, 33)。「私が驚いたのはすでに指導的な党機関における結束の欠如から生じる危険が存在していた」(*ibid.*, no.53, 173)と回顧しているように、党内の結束問題がブレジネフの注意を引きつけた。そして指導部における「結束の重要性を強調し、党の路線修正のために結束の破壊が利用されることを許容しない」(*Otechestvennye Arkhivy*, no. 3, 1993, 86)ため、ブレジネフは総会を延期するよう提案した。彼の言葉を借りれば、

現状を維持しつつ、将来的にスロヴァキア問題やその他の緊急の問題が解決されるように、予め幹部会が問題を議論し、建設的な決定を行い、中央委員会に提案するのがよいだろう (Vondrová and Navrátil eds., 1995, no.3, 33)。

このように事態が急速に進展することに歯止めをかけ、幹部会が一致団結して問題に対処するということが、ブレジネフの考えであった。

次に、ブレジネフが「議論の重要な争点は2つのポストの分離である」(*ibid.*, no.3, 32)と理解した第一書記と大統領のポストを分割する問題に関する態度を見てみよう。5月のモスクワ会談でも述べているように、「第一書記と大統領のポストを分けるという提案の問題であるとわかり、私はすぐにそこから何も問題は生じないと言った。周知のように、党と国家の分離はわが国[ソ連]でも、ハンガリーやポーランドでも行われている。何の特別な問題を引き起こさない」(*ibid.*, no.53, 173)。7月14 - 15日のワルシャワ会談でも、「チェコスロヴァキア共産党委員会の1月総会は党と国家の最高ポストを分ける比較的穏健な仕事を行った」と語り、「チェコスロヴァキア共産党中央委員会総会が第一書記のポストからノヴォトニーを解任、後に大統領のポストからも追放したとき、我々はこれらの変化に関して口を挟まなかった。それは、兄弟党や国家の内政問題」(*ibid.*, no. 92, 288, 292)であるという理由から、党内問題に介入しなかったことを明らかにした。要するに「権限の分割自体に反対しない」(*ibid.*, no.95, 306)という立場をとったのである。

しかしその実施にあたっては、「この問題が準備もなく衝動的に扱われれば、第一書記が空

席となる危険性があり、非常にデリケートな問題」であるとブレジネフは指摘した（*ibid.*, no.3, 32）。それゆえ「チェコスロヴァキアの同志たちが、国や党、国際労働運動の観点にたつて困難の広範な反響を考慮に入れず、性急にこれらの争点を扱ったことに問題がある」（*ibid.*, no.3, 33）とし、「ポストを分けるという争点が大げさにされる必要はない。徐々にかつ好ましい形で行われるべきである」（*ibid.*, no.3, 33; no.95, 306）と慎重に準備した上で行うことが望ましいという考えを明らかにした。

これまでの議論を整理すると、ブレジネフは、党幹部たちとの会談を通じて、党内の情勢を注意深く観察した。その結果、ノヴォトニーが現在の問題を解決するには彼の統治能力が不十分であるという認識に達した。その上で争点となっていた権限の分割という問題自体については理解を示した。しかしその実施の方法に関して慎重な対応を求め、党内の結束を維持することが一義的に重要であるという認識を示した。

しかし「誰も民主化や自由化という言葉を口にしなかった」（*ibid.*, no.95, 306）という発言が物語っているように、ブレジネフは、1967年末のチェコスロヴァキア情勢を党内の路線対立と捉えていた。つまり党内の結束が達成されれば問題はあつと解決に向かうと考えていたように思われる。しかし、皮肉にもブレジネフ自身が指摘しているように、学生デモや作家同盟大会の議論などが党内対立を激化させる要因として作用したのであり、その意味で脱スターリン化の圧力は党内だけに限定されず、社会全体にも広範に根ざしていたのである。それにもかかわらず、ブレジネフは共産党内の対立に還元しえない事態の複雑性や深度を認識できず、看過してしまったといえよう。つまりこのことは、彼がチェコスロヴァキアにおける危機の本質を正確に把握できなかったことを意味している。そしてこの認識の甘さが遠因となって、8ヵ月後、軍事介入という手段をとらざるをえない状況が作り出されたともいえる。

## おわりに

ブレジネフの訪問は、改革を求めるグループにとって不意の出来事であり、彼がノヴォトニーを支援するため党内問題に介入するのではないかという不安を掻き立てた（Vondrová and Navrátil eds., 1995, no.5, 35）。しかし、ブレジネフの消極的な態度はそうした不安を一掃し、反対にブレジネフの帰国後の展開は、予想を上回る速さでノヴォトニー失脚につながっていく。以下その過程を簡単に整理しておこう。

12月11日からの幹部会では、権限分割に関して、議決権を持つ10人の幹部会員が5対5に分かれ、結論が出なかった<sup>6)</sup>。結局、翌日に予定されていた総会を1週間延期すること、総会の議題は経済と政府の機構改革に限定することを決定しただけで閉会した。

19日に開かれた中央委員会総会では、まずノヴォトニーが先の10月総会における発言につい

て自己批判した。しかし議論はシクによって提起された党と国家の権限分離をめぐって進んでいき、ノヴォトニー批判は収まるどころか一段と激しさを増し、ノヴォトニー辞任が不可避な状況が形成されていった。しかしクリスマス休暇のため一旦休会となり、ここでも結論は先送りされた<sup>7)</sup>。

翌1968年1月3日から始まった総会で、圧力に抗し切れなくなったノヴォトニーは、最終的に第一書記辞任を受け入れ、後任には党内の結束を重視する意味でドブチェクが選出された。5日に発表されたチェコスロヴァキア共産党中央委員会幹部会の決議によれば、党と国家の最高ポストを兼ねた個人だけで現在の複雑化した状況に対処することは困難であるため、「大統領と党第一書記のポストを分離し、別々の2人に任せる」ことを決定した。そしてポストの分離は、「国家および政治領域における民主化過程の一部」(Navrátil ed., 1998, no.6, 35)とされた<sup>8)</sup>。こうしてノヴォトニーの失脚は「チェコスロヴァキアにおけるスターリン主義の終焉を意味し、最高指導者の交代のための扉を開き」(Ekiert, 1996, 136)、「プラハの春」と呼ばれる改革の季節が到来した。

本稿における議論を要約しよう。チェコスロヴァキアにおける脱スターリン化は、1967年に入り、ノヴォトニー批判へと収斂していった。そうした状況下でブレジネフが非公式にプラハを訪問した。ブレジネフの対応は、「これはあなたたちの問題だ」に象徴される傍観者のというよりも含みのある両義的なものであった。すなわちブレジネフは、幹部会員たちとの意見交換からノヴォトニーの権威低下を認識しながらも、党内対立の解消に向けて結束あるいは現状維持の重要性を強調した。また権限分割についてもその実施には慎重な姿勢を崩さなかった。総じてブレジネフは、危機的な対立状況を党内の問題と理解し、ノヴォトニーが現状を適切に把握し、他の幹部たちも党内結束を最優先に行動すれば、事態は乗り切れると判断したといえる。しかし彼の両義的な姿勢は、結果的にノヴォトニー退陣要求を勢いづけることになった。

共産党体制が崩壊した1989年、「プラハの春」当時首相であったチェルニーク (Oldřich Černík) が回想しているように、1967年12月と1968年8月の軍事介入、「この2つのエピソードは、まさに21年前のチェコスロヴァキアの改革運動の始まりと終わりを示していた」(Navrátil ed., 1998, no. 104, 425)。換言すれば、ソ連の対応が「プラハの春」の起点においても重要な要因であったといえよう。

## 注

- 1) 『『プラハの夏』がもっと長命であったならば、その間に党指導部内での『春』の発生経緯がもっと詳しく究明され、それがおそらくは67年10月にまで遡るものだと定説ができあがったことであろう」(佐瀬, 1983, 200) という指摘にも留意しておきたい。

- 2) 肅清裁判の全容に関しては、ベリカン監修、1973を参照。当事者の回想録として、ロンドン、1972、レブル、1982があり、Lukes, 1999, Murashko, 1997がスラーンスキー裁判について新しい資料を用いた研究を行っている。1962年の再調査の実施には第22回ソ連共産党大会におけるスターリン再批判の影響もある。
- 3) チェコとスロヴァキアの対立の背景については、Dean, 1973, Leff, 1988を参照。スロヴァキア民族蜂起については、フサークの回想録（フサーク、1978）、最近の研究としてはソ連との関係を中心に考察した Mar'ina, 1996がある。邦語では、高橋、1997、林、1998が連邦制を中心に扱っている。
- 4) ソ連指導部は、当時のチェコスロヴァキア共産党内には、教条派、改革派、スロヴァキア派の3グループが存在すると見ていた（Pikhoia, 1994, 5）。またビリャーク（Vasil Bil'ak）へのインタビューによれば（Bil'ak in Kun, 1999, 78）、ヘンドリフがチェルヴォネンコに対し「党内の8割がノヴォトニーに批判的である」と伝えたという。当然こうした情報もブレジネフの耳に入っていたと思われる。
- 5) この点に関して、必ずしも良好なものとはいえないブレジネフとノヴォトニーの個人的な関係がしばしば指摘されている。その一因は、1964年のフルシチョフ失脚に際して、フルシチョフと緊密な関係を築いていたノヴォトニーが、解任の経緯が不明瞭で民主的でないと冷淡な対応をとったことにある。ブレジネフの外交顧問であり、プラハ訪問にも同行したアレクサンドロフ＝アゲントフ（Andrei Aleksandrov-Agentov）は、「ノヴォトニーは特に強い指導者ではない。彼は、経済をよくわかっていないし、政治的な権威にも欠けている」（Navrátil ed., 1998, no.5, 23）というブレジネフの言葉を何度も聞いたと回想している。
- 6) このとき権限の分割に賛成したのはドブチェク、コルデル、チェルニーク、ドランスキー、そしてヘンドリフであった。
- 7) この12月総会から1月総会までの期間に、ノヴォトニーが、マムラ（Miroslav Mamula）やシェーナ（Jan Šejna）ら軍部の力を借りて自分に反対する勢力を一蹴する計画を進めていたことが、後に明るみに出た。しかし、ロムスキー（Bohumír Lomský）やブルフリーク（Václav Prchlik）など一部の軍関係者を通じて、計画は事前に察知され、失敗に終わった（Benčík, 1994, 12-13）。その後ノヴォトニーは、自らの権力を維持することができず、3月には、大統領職も辞任に追い込まれた。
- 8) 幹部会の人数も10人から14人に拡大され、ボルーフカ（Josef Borůvka）、ピレル（Jan Piller）、リゴ（Emil Rigo）、シュパチェク（Josef Špaček）が新たに加わった。また10月総会以降の議論から浮かび上がった課題を実施するための行動綱領を作成することも決定された（Navrátil ed., 1998, no.6, 36）。

## 引用・参考文献

- 佐瀬昌盛、1983、『チェコ悔恨史　かくて戦車がやってきた』サイマル出版会
- 高橋和、1997、「東欧における民族と国家　チェコスロヴァキアの連邦制をめぐる」ハラルド・クラインシュミット、波多野澄雄編『国際地域統合のフロンティア』彩流社
- 林忠行、1996、「プラハの春　1948年革命と1989年革命との狭間で」歴史学研究会編『講座世界史　10第三世界の挑戦　独立後の苦悶』東京大学出版会
- 林忠行、1998、「チェコスロヴァキア」柴宜弘・中井和夫・林忠行『連邦解体の比較研究　ソ連・ユーゴ・チェコ』多賀出版
- 平田重明、1977、「チェコスロバキア『再生』運動の前史的構造　社会主義への独自の道をめぐる

- 源流と逆流」東京大学社会科学研究所編『現代社会主義 その多元的諸相』東京大学出版会
- ドブチェク, アレクサンデル, 1991, 『証言ブラハの春』岩波書店
- ドブチェク, アレクサンデル, 1993, 『希望は死なず ドブチェク自伝』講談社
- フェイト, F, 1978, 『スターリン以後の東欧』岩波書店
- ハヴェル, ヴァーツラフ, 1991, 『ハヴェル自伝 抵抗の半生』岩波書店
- フサーク, グスターフ, 1978, 『スロバキア民族蜂起の証言』恒文社
- クンデラ, ミラン, 1968, 「文化と民族の存在理由」みすず書房編集部編『戦車と自由 チェコスロバキア事件資料集(1)』みすず書房
- レブル, ユーゲン, 1982, 『裁かれた良心 あるチェコスロヴァキア高官の回想』日本放送出版協会
- ロンドン, アルトウール, 1972, 『自白 ブラハ裁判煉獄記(上)(下)』サイマル出版会
- ムリナーシ, ズデネク, 1980, 『夜寒 ブラハの春の悲劇』新地書房
- ベリカン, イージー, 監修, 1973, 『粛清と復権 隠蔽された訴訟記録・チェコ共産党特別委員会報告書』三一書房
- ロスチャイルド, ジョゼフ, 1999, 『現代東欧史 多様性への回帰』共同通信社
- スムルコフスキー, ヨセフ, 1976, 『スムルコフスキー回想録 わたしは屈服しない』読売新聞社
- ヴァツリーク, ルドヴィーク, 1968, 「市民と権力」みすず書房編集部編『戦車と自由 チェコスロバキア事件資料集(1)』みすず書房
- Dean, Robert W., 1973, *Nationalism and Political Change in Eastern Europe: The Slovak Question and the Czechoslovak Reform Movement*, Denver, CO: University of Denver
- Ekiert, Grzegorz, 1996, *The State against Society: Political Crises and their Aftermath in East Central Europe*, Princeton, NJ: Princeton University Press
- French, A, 1982, *Czech Writers and Politics, 1945-1969*, Boulder: East European Monographs
- Golan, Galia, 1971, *The Czechoslovak Reform Movement: Communism in Crisis, 1962-1968*, Cambridge: Cambridge University Press
- Golan, Galia, 1972, "Antonin Novotny: the sources and nature of his power" *Canadian Slavonic Papers*, vol. 14, no. 3
- Hamšík, Dušan, 1971, *Writers against Rulers*, trans. by D. Crpington, London: Hutchinson & Co.
- Kramer, Mark, 1998, "The Czechoslovak crisis and the Brezhnev Doctrine" in Carole Fink, Phillip Gassert and Detlef Junker eds., *1968: the World Transformed*, Cambridge: Cambridge University Press
- Kun, Miklós, 1999, *Prague Spring, Prague Fall: Blank Spots of 1968*, trans. by Hajnal Csatorday, Budapest: Akadémiai Kiadó
- Kusin, Vladimir V., 1971, *The Intellectual Origins of the Prague Spring: the Development of Reformist Ideas in Czechoslovakia, 1956-1967*, Cambridge: Cambridge University Press
- Leff, Carol Skalnik, 1988, *National Conflict in Czechoslovakia: the Making and Remaking of the State, 1918-1987*, Princeton, NJ: Princeton University Press
- Lukes, Igor, 1999, "The Rudolf Slánský affairs: new evidence" *Slavic Review*, vol. 58, no. 1
- Navrátil, Jaromír, ed., 1998, *The Prague Spring 1968: A National Security Archive Documents Reader*, Budapest: Central European University Press
- Paul, David W., 1974, "The repluralization of Czechoslovak politics in the 1960s" *Slavic Review*, vol. 33, no. 4



- Remington, Robin Alison, ed., 1969, *Winter in Prague: Documents on Czechoslovak Communism in Crisis*, Cambridge: MIT Press
- Rice, Condoleezza, 1984, *The Soviet Union and the Czechoslovak Army, 1948-1983: Uncertain Allegiance*, Princeton, NJ: Princeton University Press
- Shore, Marci, 1998, "Engineering in the age of innocence: a genealogy of discourse inside the Czechoslovak Writer's Union, 1949-67" *East European Politics and Societies*, vol. 12, no. 3
- Skilling, H. Gordon, 1976, *Czechoslovakia's Interrupted Revolution*, Princeton, NJ: Princeton University Press
- Sodaro, Michael J., 1990, *Moscow, Germany, and the West from Khrushchev to Gorbachev*, Ithaca: Cornell University Press
- Tigrid, Pavel, 1971, *Why Dubcek Fell*, London: Macdonald & Co.
- Valenta, Jiri, 1991[1979], *Soviet Intervention in Czechoslovakia, 1968: Anatomy of a Decision*, Rev. ed., Baltimore: The Johns Hopkins University Press
- Williams, Kieran, 1997, *The Prague Spring and its Aftermath: Czechoslovak Politics, 1968-1970*, Cambridge: Cambridge University Press
- Benčík, Antonín, 1994, *Operace "Dunaj", Vojáci a Pražské Jaro 1968: Studie a Dokumenty*, Praha: Ústav pro Soudobé Dějiny AV ČR
- Navrátil, Jaromír, 1995, "Historický uvod" in Jitka Vondrová and Jaromír Navrátil eds., *Mezinárodní Souvislosti Československé Krize 1967-1970: Prosinec 1967-Červenec 1968*, Brno: Nakladatelství Doplněk
- Vondrová, Jitka, and Jaromír Navrátil eds., 1995, *Mezinárodní Souvislosti Československé Krize 1967-1970: Prosinec 1967-Červenec 1968*, Brno: Nakladatelství Doplněk
- Ústava Československé socialistické republiky (<http://www.psp.cz/docs/texts/constitution.1960.html>)
- Mar'ina, V. V., 1996, "Sovetskii Soiuz i Slovatskoe natsional'noe vosstanie, 1944 g" *Novaia i Noveishaia Istorii*, no. 5 and no. 6
- Murashko, G. P., 1997, "Delo Slanskogo" *Voprosy Istorii*, no. 3 and no. 4
- Pikhoia, R. G., 1994, "Chekhoslovakiia, 1968 god: vzgliad iz Moskvy po dokumentam TsK KPSS" *Novaia i Noveishaia Istorii*, no. 6
- "Ot raskrytiia arkhivov po 'prazhskoi vesne' nikuda ne uiti (nobyte dokumenty o sobyitiakh v Chekhoslovakiia 1968 g.)" *Otechestvennye Arkhiivy*, no. 3, 1993

## The Fall of Antonín Novotný Reconsidered: A Focus on Brezhnev's Visit to Prague in December 1967

The Prague Spring and its tragic end by Soviet intervention in August 1968 was one of the most significant events in Soviet-East European relations during the Cold War. The focus of this paper is on the origin of the Prague Spring; the fall of Antonín Novotný with particular attention to Brezhnev's visit to Prague in December 1967.

The first argument concerns three aspects of de-stalinization in Czechoslovakia; the rehabilitation of the unjustly prosecuted victims in the 1950s' political trials, the Slovak question, and the failure of state-planned economic policy in the 1960s.

The second section deals with the erosion of Novotný's authority in 1967. In this case, which is critical of him, special attention should be paid to the 4th Congress of the Czechoslovak Writer's Union in June and the plenary session in October.

The third part of this paper examines Brezhnev's visit to Prague on 8-9 December 1967, namely the aim and content of his visit, and its implication for the fate of Novotný. The argument based on new evidence suggests that while Brezhnev had the impression that Novotný lost his power and could not resolve problems, he advised the presidium members to rebuild the unity and maintain the status quo under Novotný.

In consequence, Brezhnev's ambivalent attitude led Novotný to resign the first secretary and Dubček was elected as the new party leader on 5 January 1968.

( AGATSUMA, Shin'ichi , 本学大学院国際関係研究科後期課程 )